

特集 子どもをどう育てるか

●出典：「育てる」通巻183号 昭和58（1983）年9月25日発行

四つの柱

中川 尚利（奥多摩町立古里小学校 校長）

我が子に「心身ともに健全で、かしこく、伸び伸びと育ってほしい」と願わない親はいないでしょう。このことは、いつの世にも変わらぬ親心ではないでしょうか。

六十歳に近い私共夫婦は、戦後の混乱期を乗り越え、高度成長をとげた繁栄の中で、生活も安定し、知らず知らずのうちに自分自身や次の世代を受け継ぐ子どもに対し、生きるきびしさや考え方が甘くなりがちになつてきているように思います。

平和にささえられた繁栄の中で、私共も若者も、世の中のようにすが変わっていくことに目を向け、共に学びとることも大切ですが、それと同時に、変わらないものは何か、変わっていけないものは何かをきちんとおさえ、次の世代に受け継がせていかななくてはなりません。

次代を受け継ぐ青少年の問題は、結局のところ、私達人人の問題であり、「今の若者や子どもは」という批判の前に大人の自覚が重要な「かぎ」になつてきているように思います。

豊かさにふさわしいきびしさ、このことを忘れてしまった人は、それだけ心身共になまつてしまい、安易な生活に流されてしまう人になつてしまいます。

人間形成の重要な場である家庭・学校・地域社会のもつ教育の役割には、変化していく面と変化しない面があります。

特別な事情のある家庭以外は、子どもを養育するという親の役割りは変わらないでしょうし、家庭が人生におけるかけがえのない基本的な場であるということも変わらないはずで。

学校や社会にもそれぞれの果たすべき重要な役割りがありますが、幼児期における人間形成の基礎は、家庭にあるということを忘れてしまうと、学力偏重にかたより、いつの間にか学校教育が中心になってしまい、非行や暴力だけでなく、精神面や健康面での問題が多く議論されマスコミをにぎわす結果になってしまいます。

家庭のもつはたらきの中には、世の中がどのように変化しようとも、人間形成の上で見失ってはならない基本的なものがたくさんあることを考えなおしてみなければなりません。

子どもにとって、両親の考え方や日常生活の行動は、無言のうちに子どもの日常生活を形づくり、子どもの

人となりに大きな影響を与えてきます。両親のまじめな人生に対する姿勢は、子どもの生活態度を直接・間接的に形づくっていくものです。家の中がきちんと整とんされ、おちついた雰囲気の家、人のよい所をほめても悪口を子どもの前で言わない姿。真剣に仕事にうちこみ、きびしいけれど温かみのある姿。口で子どもをしかりつけるよりも、態度で示す両親の道徳的な行動、このようにきびしい中にも温かみのあるしつけをしている家庭に育てられた子どもは、考え方や行動面にも一本のすじがとおりしつかりとしています。甘やかされ、ほしいものは何でも買って与えられ、手とり足とりで育てられた子どもは、心身ともになまってきた、きびしさや困難には耐えられないようになってくることは、自然のなりゆきでしょう。

私共夫婦には、三人の娘と孫が一人おります。三人とも大学を卒業し社会人として働いておりますが、現在でも三人の娘に一貫して教えつけてきた四つの柱があります。私の父母の生き方から学び、私の座右の銘にするとともに、子どもを育てる柱としてきたものです。

一、人と人との交わりは、温かい心で

二、自分をみつめるときは、厳しい心で

三、考えるときは、澄んだ心で

四、運動や仕事をするときはフアイトのある真心で

この四つの柱を中心に、自然とのふれあいを大切にしながら教え、しつけてきました。

三人三様、性格や個性も異なり、運動能力も違いますが、健全に育つて来ているように思います。

最近、子どもたちが利己的で、ひ弱になってきているということをよく耳にしますが、これらも、自然にふれる機会がだんだん少なくなり、自然の変化や驚異に目をみはり、感動し、たくましさを育てる環境が失われがちになり、小さな人工的なものの中に閉じ込められてしまったためではないでしょうか。

私は、この四本の柱を中心にして自然とのふれあいの機会を多くし、四季おりおりの自然の変化と驚異を、子どもの身体をとおして経験させるよう努力してきました。このことは、ものの見方、考え方を伸ばすことに役立つだけでなく、情緒の安定と創造性を育て、大人になっても心の底深くのこり、身についた活動を生

み出すものになってきているようです。

豊かな心を育てるということは、人間形成の上で欠くことのできない重要なことです。長い人生において、いくたびとなく壁に突き当たり悩むことがあっても負けることなく、それを突き破り、克服してゆくたびに新たな進歩が生まれてくる強い素地を家庭の中で養うとともに、次の世代へ伝えていかなければなりません。そして、時代に相応し、自己の個性を伸ばし、大きく伸びてゆくことを祈らずにはいられません。

●出典…「育てる」通巻183号 昭和58(1983)年9月25日発行

日本人育成の教育方法

藤本 学 (府中市立南町小学校 校長)

1. 自然に遊び学ばせよう

私たちの先人は、春夏秋冬厳しい自然の変化と闘いながら、山野を駆け、大地を耕し、河海に糧を求め、生活を発展させてきました。暮らしの平穩、自然との調和の中でさまざまな風俗習慣、文化が築かれて来ています。

近年私達の周囲は、物が豊かになり生活がいちだんと便利になり、ややもすると自然から一步離れたところで生活が成り立つようになりました。

子どもたちの遊びや学習も大きく変化してきました。ゲームウォッチやプラモデル、テレビやマンガなど、それだけに没入している子どもたちに、自然の外遊びをすすめ遊ぶことによつて学ばせたいと思うのです。

野外で思う存分遊ばせる。石けりやかくれんぼ、虫とりや魚つり、泥んこになつてころげ回る。土塀とか川とか、流れる雲、夕焼け空とか。そういつた自然の中の豊かな原体験を数多く味わわせたいと思います。

自然の遊びから学ぶものとして、

- ・体が丈夫に育つ
 - ・友だちとの付き合い方を学ぶ
 - ・遊びを創ることをおぼえる
 - ・思いやり・助け合いの気持ちが育つ
 - ・生活の充実感や成熟感を味わう
 - ・自然をおそれ、教わる気持ちが生ずる
- このようなしつかりした豊かな経験をさせたいのです。

2. 進んで働く子を育てよう

最近の子どもたちは、一日の生活の中で働く場面が非常に少なくなりました。家族の一員として寝具の片付け、食事の準備や片付け、部屋の掃除や遊んだあと始末など、当然に果たすべき仕事がありながら、働くことを軽視する傾向が多く出てきています。

多くの学校では、進んで働く子どもを育てるために、水田稲作・さつまいも栽培・地域清掃、など勤労を通して学ばせる機会をつくつていきます。

- ・働くことをいやがらずにとりくむ
- ・つらいことをがまんしてやりとおす
- ・働くことを喜び感謝する
- ・食べ物や身のまわりの物をだいにする
- ・働くことの充実感や成就感を味わう

このような貴重な体験をさせることによつて、次への自信や意欲を培っていきたいと考えるのです。

このことは、決して一朝一夕にできるものではありません。家庭における基本的な躾や親の生き方、子どもへの感化の度合い、また学校における教師と子どもとの真剣なとりくみ、教師の人間性の表出とはたらき、

友だちとのさまじまなかかわり合いなど生活の一コマ一コマを追って、進んで働く子どもへと大きく育っていくものです。

3. たくましい子を育てよう

幼稚園児で、シャツのボタンをはずせない、センベイの包み紙がとれない、小学校三・四年生で、休み時間になっても室内でぼんやりしている、ケンカがおきてもとめられないで無関心な子、クラブ活動の入部で自分の希望するところがない子……など、無気力・無関心な子が増えています。

自立すべきときにしつかりと自立できない、集団として活動するときには集団へ入れない子があるのです。家庭と学校とでしつかりと連携をはかり、基本的な生活習慣を身につけさせてやりたいと思います。

健康な身体とたくましい体力、意欲をもって最後までやりとげる意思の強さ、困難なことをのり越えるたくましさを育てていきたいと思えます。

たくましさについては、身体的なたくましさと同時に、心のたくましさがいじなことです。心の虚弱児

をつくらないような、まわりの大人の連携プレーが必要なことです。

たくましさを育てるポイントとして

- ・ 具体的な場をつくる
 - ・ 認め励まし・改めさせる
 - ・ 積み重ね継続をはかる
 - ・ 子どもの欲求にケジメをつける
- この四つのことを考えています。

毎日の子どもの学習や生活、どの場面をとつても継続や積み重ねが大切です。自分の今までの力を精いっぱい出しきって、新しいものに挑戦する、失敗したらどこが悪いのか、さらに意欲をやりし再度挑戦するという確固たる気持ち育てたいのです。

4. 文化や伝承をだいじにする子を育てよう

私は、朝会の話として、月一〜二回民話を話しています。民話の心は、話のすじの面白さだけでなく昔の人びとの生活や仕事の中の夢・笑い・涙に、じかに接する機会だと考えます。

人は、どんなときでも、正しく、たくましく生きな

さい。と教え、励ましてくれまます。日本の国土や民族が営々として生き続けるように、あとに育つものに、その懐に深くふれさせ、日本人の心を伝えたいと思うのです。

また、古くから伝わっている伝承遊び、竹馬・コマ回し、カルタとり、陣とりおに、お手だまなどもとり上げていきたいと考えています。男・女一緒にになり、異年齢集団の遊びをすすめていきたいと思っています。

私たちの生活は、タタミからジュウタンへ、そして火鉢からストーブへと変わってきています。合理性や便利さ、簡潔さ、快適な生活志向は当然なことですが、変わるものと、変わらないものがあります。

物が変わり生活様式は次第に進歩し、ことばも当然変わっていくが、この国に古くから伝わってきた「日本人の心」は、次代に伝えていきたいと考えています。

●出典…「育てる」通巻175号 昭和58(1983)年1月25日発行

基本的生活習慣

— 就学前の家庭教育

比留間 一成(中野区立第五中学校 校長)

基本的な生活習慣とは、人として社会の生活にうまく適応するために、身につけておかねばならない、睡眠、食事、排せつ、着脱衣、自立、安全の六つの習慣をいいます。

始めの三つは、生理のリズムをつくる上で大切です。後の三つは社会でくらすための最低のもので、これを基本にしていろいろな行動様式がつけられていきます。これらは主に、一歳半ごろから三歳ごろまでにかけてしつけられていくもので、この時期は自律感の獲得として、人生の大切な節になっています。つまり、これらは母親から分離した自分というものを意識して、自分のからだを管理する仕方を学ぶことにより獲得できるもので、これに失敗すると羞恥心や疑惑を生じせるといわれています。

(1) 睡眠の習慣

何時にねて何時に起きるかが問題です。一般に夜型の子が増えていますので朝型に切りかえるようにしつけてください。朝起きて、自分の身じまいをし、食事をし、排せつをして学校へいく習慣を是非つけたいものです。食事をおいしくとるにはゆつくりした時間が必要ならぬし、排せつの時間や自分で衣服を身につけるようにさせる時間はどれだけ必要かを計算し、何時に寝かせるかを考えるべきです。睡眠が、他のしつけを決定づけるといつてもよいでしょう。

(2) 食事の習慣

食事は一日三回が普通ですが、学校にあがると一回は学級集団の中でみんなと一緒に食べます。留意すべきことは、

- ・栄養のバランスをとって食べる。
- ・余り遅くても早くてもいけない。まわりとのバランスをとって食べられるようにする。
- ・家庭では、テレビを見ながら、マンガを読みながらの食事は排すようにする。

・食事のマナーが守れるようにする。

・箸が使えるようにする。

などでしょうか。食事は最もよい薬と考え、偏食をなくすようにしましょう。

・食事の遅い子は何かにつけてゆつくりしているの、生活全体をみてゆつくりなおしましょう。

・テレビを見ながらでは消化に悪いし、勉強もながらになりがちです。

これらは気長に直すようにし、食事の時に注意せず、他の時間にわからせることが大切です。箸の使い方などは、わ椀に小豆粒などを入れて、他の器物に移す遊びなどをやらせるのもよいでしょう。その他食事のマナーとして、他の人に不愉快な感じを与えることは注意しましょう。友だちに嫌われる原因にもなります。偏食のひどい子は、医師に相談し徐々に直すようにさせましょう。

(3) 排せつの習慣

排せつは先に述べたように食事とも睡眠とも関係があります。

・子どもが幼稚園や保育所に行きだすと親は便に関心をもたなくなるようです。赤ちゃんのときは便の色を見て健康管理をしていたのですから、大きくなっても、朝の大便には関心をもってください。

・子どもの下着をみることで、身体の状態もわかるでしょう。清潔感をもたせることが性教育につながります。

(4) 着・脱衣の習慣

これは衣服を脱いだり着たりすることです。小学生になると他と自分をみくらべるようになりますから、うまくできないと笑われたりします。そのために学校へ行かなくなる子もいるので、家では自分でやるようにしてください。

- ・下着から順に身につける。
- ・上から順に脱いでいく。

靴下をはいたり、ぬいだりすることも合わせてやらせてみてください。他にボタンの多いシャツ、紐ひもでゆわくものなど子どもにとっては難物もありますが、時間を十分にかけて練習させることが大切です。これら

のできない子は、親が手をかけ過ぎている場合が多くみられます。

(5) 自立の習慣

自立というのは、身のまわりのことを自分ですることです。

・顔を洗う、歯をみがくなどから、トイレの始末、食事の配膳や片づけ、寝具のだし入れ、学用品・遊具・道具・衣類等の整頓、小さい物の洗たくなど日常生活のすべての中にあります。

・だらしのない子は、何かいい才能をもっている、完成しなかつたり、仕上げが悪かつたりします。基本的なことは日常の中にあるので、自立を心がけることが大切です。

(6) 安全の習慣

安全の習慣は、注意深い子を育てることからです。それには、今までのべてきた他の習慣が身につくことです。寝不足では事故を起こしやすいし、排便がうまくいかなくても同様でしょう。おなががすいて

いても危険です。このほかに、人と生活する際の注意として、

- ・刃物などの渡し方、うけとり方、使い方。
 - ・器物や道具の扱い方。
 - ・遊びのルールを守る。
 - ・交通安全上の注意を守る
- などがあります。これもどれほど身につけているかをチェックする必要があります。

基本的な生活習慣は、毎日の生活の中でつくられていかねばならないものです。そして身につくことで、情緒の安定した人柄が得られることも期待されます。いま一度点検してみてください。



●出典：「育てる」通巻13号 昭和44（1969）年5月15日発行

「しつけとは？」と問われて

楠本 敏宗（墨田区立緑小学校 教諭）

「子どもは、親の言うとおりににはならないが、親のするとおりににはなる」

私は、しつけという言葉を耳にすると、すぐのことばを思い出す。たしかに、ことばづかいのいいいな子どもの親に接すると、ことばが少なくても要領を得て温かみのあることを感ずるし、き帳面な子どもの家庭を訪問しては、訪問先でそれらしい雰囲気を感じてしまう。それだけに、家庭の親の影響力の大きさを痛感するのである。

数年前の教え子にKという少年がいた。父親と、どうしたわけか性が合わず反抗ばかりしていた。ある日父親にたのまれて、その間の事情をKから聴取することにした。その時、何を聞きとつたかはすっかり忘れてしまったが、いまだに忘れえないのは次のことである。

話が進んで、「きみは、おとうさんの悪口ばかり言っているようだが、おとうさんに感心することはないか」

と聞いた時のことである。Kは「ある」と即座に答えたあと、「おとうさんは、洋間に入っていく時、はだしで入っていくとすぐ叱る。しかし、おとうさんはいつでもきちんとはいている。洋服をぬぎずてでもすぐおこる。でも、おとうさんは、帰るとすぐ洋服を脱いでハケを自分でかけ、洋服ダンスにかたづけける。それはたいへんえらいと思う」とつけたしてくれた。そこで「君は、それを実行しようと思っているのか」と聞くと、「したいと思う、そのように努力している」と答えたのである。しつげはまさしく言ってさせるのではなくしてやって見せる事であると思う。親子関係がどうあるとも行為には無条件についていくものである。「親のできる範囲内でしかししつげをする事はできない」とも言われている。教育の心髄がそこにあるようである。親となったその日からしつげは始められねばならない。いや始まっているのである。親の模範と、親が作ってくれた環境の力によってよいしつげはつくられていくのである。「子どもは、親の後ろ姿と横顔を見て育つ」という言葉がそれを如実に説明しているように思う。即ち、子どもは、親の正面の顔からは、

真なるものは学ばない。口先の言葉からは学ばないと
言ってもよいであろう。なにげなしに言った言葉、なにげなしにしたことから学ぶというのである。

それだけに、幼児の手をひいて、横断歩道でないところをかけぬけて行く親の姿は気になるし、パチンコ屋へ、子どもを連れていく親の心は何としても解せない。

赤ちゃんを、おんぶして散歩しているおばあさんは、他人の垣根の花を取って、「きれいな」といつて赤ん坊に見せる。他人の垣根の花は取ってもいいと教えているようなものである。外国では、落ちている花を拾って与えると言う。

私は、しつげを考える時、問題はいつも自分にふりかかってくる問題だと思っている。私はいつも立派にふるまっているし、子どもにも常に注意しているのに子どもは駄目だという方がよくある。例外は常にあるものである。しかし、こうした認識が私は一番こわい。

再掲載を受けて――

子どもを思う、子どもを信じる

大嶋 しおり（現・山村留学指導員）

テーマ『子どもをどう育てるか』、いつの時代も何歳になっても、きつと親が想い続けることなのかもしれない。再掲載記事を読み、これまで出会った山村留学生とその保護者の方との関わりを思う。この仕事をしていて、大好きだなあと実感する瞬間のひとつが、いろいろな家族がいると感じること。保護者の方が集まる活動や懇談の機会では、普段の留学生の様子、頑張っている姿、その子の課題などを話しながら、それぞれの保護者の方の思いを聞く。ひとつのことに關しても、じっくり待つ親、心配してもっと知りたい・何かできないかと動く親、お手紙で遠くから応援しているよと子どもに伝える親、いろんな方がいるが、いつだって親の想いを感じる。そんな保護者の方と、可愛い留学生について話すの

が大好きだ。

ある日、留学生同士が喧嘩、翌日留学生は「今日の心の状態では学校で勉強できない」と言って学校から帰ってきた。「そんな日もあるね……」と英語村でその日は過ごした。その出来事について、私たち指導員はみんなそんなことがあったと共有する。保護者の方や学校の先生とも、出来事の共有、留学生の気持ちはこうなのではないかと憶測し、どんな言葉がけをしようか、どんな心もちで様子を見ていこうか、そんな話をしていく。

たくさん大人の大人たちが一人の子どものために話す。大人同士の意見が異なったり、いくら話しても子どもの思いがわからなかったり、事態は何も変わらないことがあったり状況はさまざま。しかし、関わる大人全員が、一人ひとりの留学生を思っていることは確かだ。そう感じる時、この時間が大切なんだろうなあと思う。

私が勤務するくらぶち英語村は、育てる会の山村留学施設のなかでも、子どもたちと関わるスタッフの人数が多い。日本人スタッフ・外国人スタッフは、異なる言語とバックグラウンドを持ち、個性があり、それぞれの得意分野がある。ベースには、子どものために、充実した

留学生生活のためにという共通の思いがあるが、子どもたちとの関わり方や具体的な考え方は、これもまたスタツフそれぞれである。さらに施設の運営をする高崎市の職員、日々子どもたちの食事とその献立を作る調理員、子どもたちが掃除しきれない部分を清掃してくださる清掃員など、たくさんの大人が英語村を出入りし、さまざまな時間や場所で、留学生との関わりを持つ。留学生は、そんなたくさんの大人と関わり、時に留学生生活の相談をし、時に知識や考え方を学び、時に遊びを教えてもらう。その関わりと時間の積み重ねが、ここで留学して得る体験活動や英語の力、生きる力を、濃く深くし、留学生を成長させるのだろう。

「子どもは自ら学んでいく力と意欲を持っている。」

『『想い』が子どもを育てる』。私が育てる会で教えてもらい、大切にしていることだ。留学生と関わる誰もが、子どもたちに「想い」があり、留学生が可愛く、留学生の成長に喜びを感じる。

ある日の留学生同士の喧嘩は、学校で勉強できないくらい心がモヤモヤしていたそうだが、休んだ翌朝は、歌をうたって元気に登校していった。きっと解決はそんな

に簡単ではないが、気持ちは別の方向へ動き出したのだろう。数日後、自分の畑から立派な野菜をとってきて、家族に送りたいと、野菜を大切に梱包する姿があった。その子にとつて、何がきっかけになったのか、どれくらいの時間が必要なのか、私には計り知れない。もしかしたら、また同じような喧嘩や困難がやってくるだろうし、学校に気持ちが向かない日もあるかもしれないが…。そんな繰り返しも、いつかは乗り越えられるし、笑って何かの自信に変えられるはず。

一年間の親元を離れた山村留学。留学生にもその家族にも特別な想いがあるはずだ。一日一日は目の前の「楽しい」、「大変」などに忙しいかもしれない。でも一年を振り返ったときに、忘れられないくらいとびきり大変で、でも楽しくって温かくって、やりきったあゝという一年にしてほしい。指導員の立場で、留学生を想い、その子に関わる周りの人と一緒に、またその子を想い、子ども力を信じて、見ていくことに尽きるのだと思う。

そうしていきたい。